

小田原城における 戦国から近世初頭の陶磁器群の様相

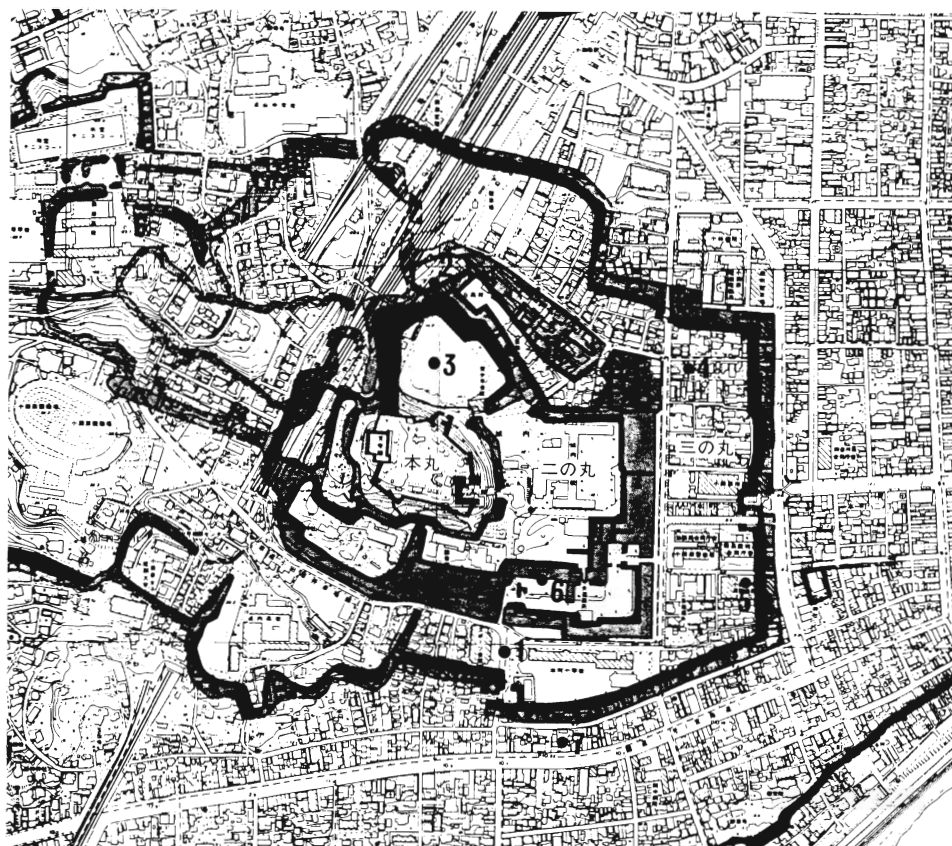
諏訪間 順

はじめに

小田原城とその城下は、戦国期には後北条氏の本拠地として、関東の政治・経済・文化の中心的な都市であるとともに、箱根をひかえた東海道の交通拠点としての役割も担っていた場所であった。後北条氏は、城下に大工・絵師・刀工、鍛冶屋、外郎（製薬売）など各地から商工業者を招へいし、市場の整備などを行うとともに、小田原用水と呼ばれる上水道の整備をはじめとする都市基盤の整備も併せて行った。こうした都市整備は、小田原城の縄張の拡張や改変と同時に繰り返され、天文年間（1532～1551）には都市としての形が作られたものと推測される。

この小田原城及び城下は、ここ10年の間に史跡整備や市街地の再開発に伴う調査が急増し、現在までに80箇所を越える地点が調査されている（塚田1990）。こうした調査によって、後北条時代から幕末、さらには明治時代に至るまでの遺構と遺物が数多く検出されている。そして、各調査地点の遺構の変遷の検討や絵図・文献等との対比などから小田原城の発展過程が部分的ではあるが明らかにされつつある（塚田・諏訪間・大島・山口1991）。特に、出土陶磁器の編年網が整備されたことにより、検出された遺構に年代観が与えられ、相互に比較検討できるようになったことが、こうした検討の基礎となっている。この陶磁器の変遷観は、15世紀から19世紀末までの約500年間を新出陶磁器を指標に小田原Ⅰ期からⅦ期までの7期に区分しているもので、筆者等は「小田原編年」と呼んでいる（塚田他1988・大島1990・山口1991・諏訪間1993）。各期の内容は質・量ともに豊富な時期ばかりとはいえないが、一消費（都市）遺跡において遺跡の形成時期から廃絶時期を通して陶磁器の編年が組まれていることは少なく、この点で貴重であると考えている。

さて、筆者は戦国期の小田原城について簡単に報告する機会があり、その中で、戦国期の陶磁器群についての概要を述べたことがあるが、紙面の都合により十分な説明と資料提示ができなかった（諏訪間1992）。本稿では、戦国期の小田原城の陶磁器群を中心に、出土事例の集成を行い、消費地遺跡小田原での戦国期から近世初頭の陶磁器群の変遷について若干の検討を行うことにする。



第1図 位置図(三の丸以内) 1. 箱根口跡 2. 焰硝曲輪 3. 城米曲輪 4. 山本内蔵邸跡第IV地点 5. 大久保弥六郎邸跡 6. 二の丸中堀 7. 欄干橋町遺跡

1 小田原編年

小田原城及び城下の陶磁器群の変遷は、既に何回か検討を加え、その内容を提示している。1988年に「小田原城及び城下における陶磁器群の変遷」として、『貿易陶磁研究』No. 8に発表したのが最初である(塚田・大島・諏訪1988)。これは、中国染付、志野・唐津、初期伊万里、伊万里くらわんか碗といった陶磁器を新出陶磁器として捉え、その出現を画期として、I期からV期までの大別を行ったもので、最初の「小田原編年」である。その時点では、15世紀～19世紀までを取り扱いながらも、資料提示は16世紀から18世紀までであった。その後、大島慎一氏によって資料の増加により、かわらけ、漆器、瓦を含めた小田原城及び城下の出土遺物の変遷観がまとめられ、江戸時代末期に出現する瀬戸染付磁器の出現をもってVI期が設定された(大島1990)。続いて、山口剛志氏は、これまでほとんど検討されていなかったかわらけの形態分類を行い、各形態の消長を陶磁器群の変遷

と対応させその変遷と画期について検討が行った（山口1991）。さらに、筆者は、明治時代に入って出現する型紙摺り・銅板摺りなどの所謂「印版染付」を指標に小田原Ⅶ期を設定した。（諏訪間1993）。この間、これまで基準資料として挙げられていた遺跡の報告書が相次いで刊行され、遺構一括出土陶磁器の資料化が進んできている（井上1989, 降矢1990, 井上1992a, 井上1992b）。

小田原編年は、以上簡単に振り返ったように、資料の増加により、随時追加検討が行われているもので、まだ、確立したものとして考えていない。特に、各期の組成の内容や遺跡毎の差異を充分把握しきれていない面もあるが、こうした点は今後も修正を加え、消費地遺跡小田原の地域編年を整備していきたいと考えている。

2 出土事例とその位置付け

ここでは、戦国期～近世初頭の一括遺物を出土した主要な調査地点の概要とその出土遺物について説明する。説明にあたっては、明染付は小野分類（1982）、かわらけについては山口分類（山口1991）に従う。なお、提示した実測図は縮尺1/4に統一してあり、大型品である甕・播鉢・瓦は1/6である。

(1) 箱根口跡

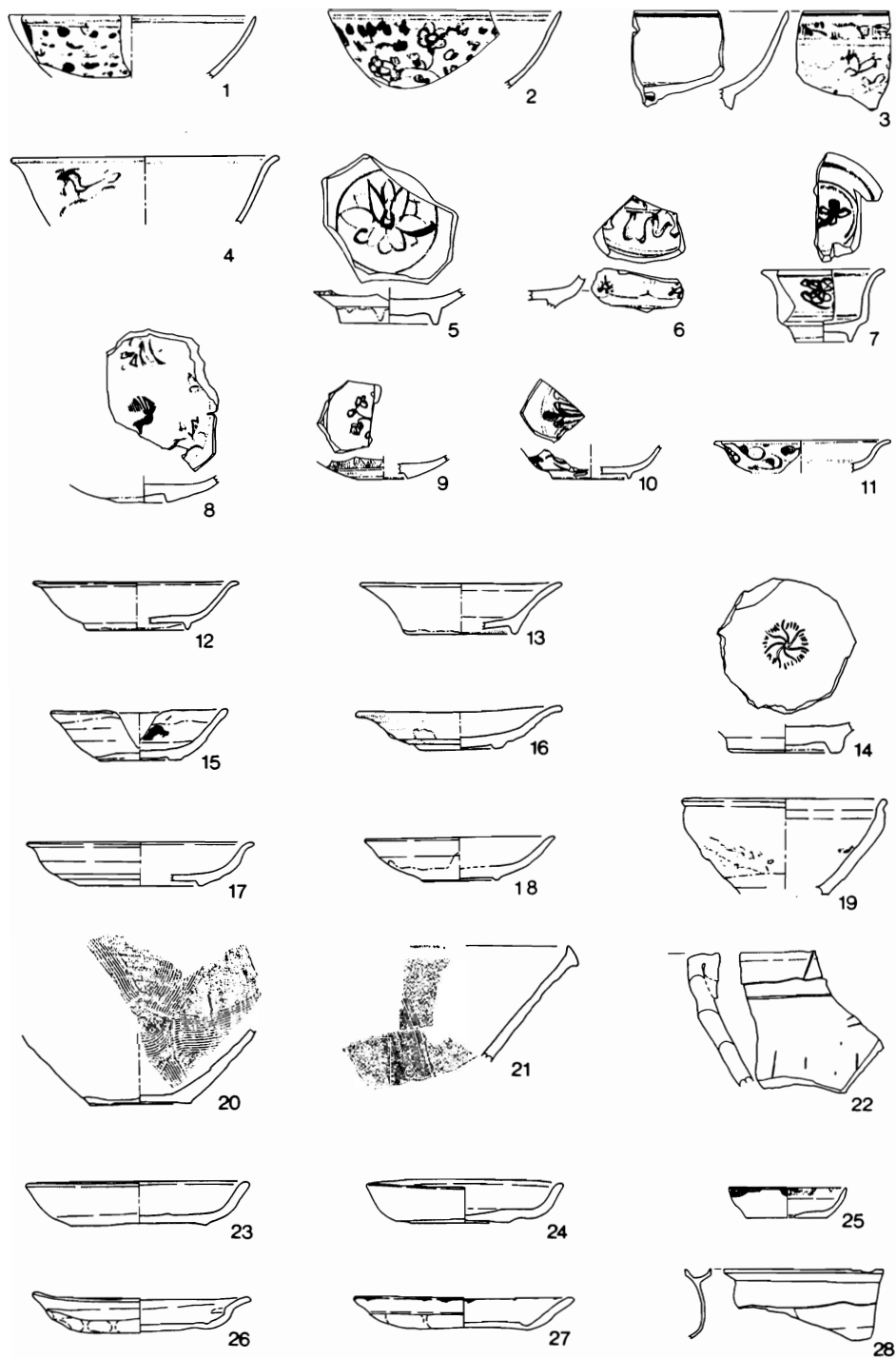
箱根口は、三の丸・箱根口門から二の丸へ至る一帯である。1986年から87年にかけて排水路改修工事に伴う調査が実施され、近世化工事以降の姿を示す正保図（1644～1647に成立）以降の城絵図には描かれていない、3本の堀、溝、水路、井戸等が検出された（諏訪間・井上1992）。

1号堀出土遺物（第2図1～28）

1号堀は断面V字状の堀で、幅約4m、長さは75m以上、深さ2.5～3m程度の規模を持つ。箱根口跡では最も下層から検出された遺構である。覆土下層を中心に染付、白磁、青磁、灰釉皿、鉄釉皿、天目碗、播鉢、甕、鉢、かわらけ、羽釜等が出土している。

1～11までが明の染付である。碗は、胴が緩やかに開く「蓮子碗」で小野分類（小野1982）のC群が主体を占めるが（1～3）、口縁部端反りのB群（4）や見込みが平坦で広く、腰部が張るD群（6）なども少数ではあるが存在する。また、腰部が張る端反りの小杯もある（7）。皿は底部が碁笥底のC群（8・9）と口縁が端反り、外面に唐草文、見込みに十字花文を描くB1群（10・11）とで構成される。白磁は、端反りの皿C群がほとんどを占め（12）、高台から外反気味に立ち上がるもの（13）は1点のみであった。青磁はいわゆる稜花皿（14）などが認められたが、極めて少ない。

灰釉はすべてが皿で、口縁部のみに施釉する縁釉皿（15）と、外面腰部から高台内が無



第2図 箱根口跡1号堀〔S = 1/4 ただし甕・播鉢・瓦は1/6〕

釉で削り出し高台のもの(16)、端反りで全面に施釉するものがある。鉄釉皿(17・18)は全て端反りであり、底部が碁笥底(18)のものもある。灰釉、鉄釉ともに瀬戸・美濃産である。播鉢もほとんどが瀬戸・美濃産で(20・21)、1点だけ備前産のものがある。甕は常滑産である(22)。

かわらけは破片数で約1,300点あり、陶磁器と含めた総数約3,650点の86%を占める。A類(ロクロ成形で底部を糸切りするもの)(23~25)55%、B類(手づくね形成で、底部を指頭成形するもの)(26・27)45%の割合である。羽釜は薄手のものが出土している(28)。

1号堀出土の陶磁器は、染付碗C群、染付皿B1群・C群を中心とし、文様が飛馬文や十字花文、蓮弁文等によって構成される染付と窖窯段階末の縁釉皿と大窯段階初期の端反り皿の存在によって年代が押さえられる。こうした特徴を持つ陶磁器群は、小野正敏氏によって第Ⅱ期として15世紀後葉から16世紀前葉に位置付けられている(小野1985)。類例としては、天文6年(1537)に作られ、天文23年(1554)に焼亡したと考えられている島根県新宮党館や福井県一乗谷Ⅲa遺構面、江戸城竹橋門第Ⅱ期の遺構群(古泉1991)などが挙げられるが、小野氏の第Ⅱ期でもより後出の様相を持つ新宮党館に対比させ、天文年間を中心とした16世紀第2四半期に位置付けておく。

1号井戸・1号溝出土遺物(第3図29~37)

1号井戸は、上部に石組施設を持つ井戸で、調査の所見から1号堀の埋没後に構築されたと考えられる遺構である。陶磁器は、いわゆる「菊皿」と呼ばれる白磁皿D群(29)、瀬戸・美濃産の肩があまり張らず、腰部に鉄化粧を施している天目碗(30)、同じく瀬戸・美濃産の播鉢(31)がある。かわらけは、手づくねのB類(32・33)が主体を占める。

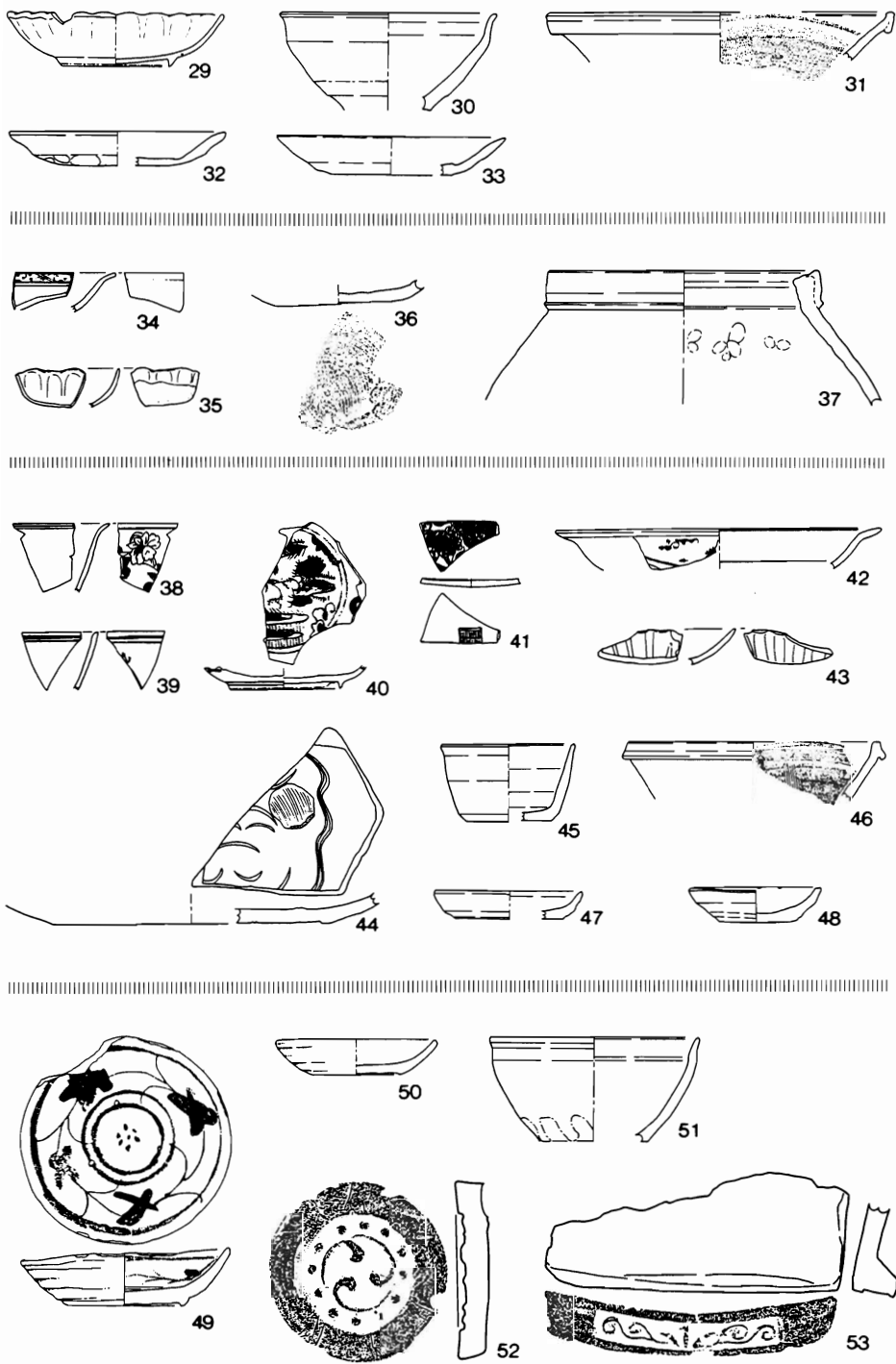
1号溝は1号堀の埋土中に構築されている溝で、口縁内面に四方樺文をもつ端反りの染付皿でB2群(34)、青磁「菊皿」(35)、器形不明の白磁小破片、ロクロ形成のかわらけA類(36)、口縁が外側に折り返され胴部に密着するタイプの常滑産の甕(37)が出土している。

1号井戸・1号溝の出土遺物は、染付皿B2群、白磁皿D群、青磁の菊皿など箱根口1号堀にはみられない新しい器種が含まれている。このセット関係は、小野氏の第Ⅲ期にみられる内容で、16世紀後葉に位置付けられているものである。類例としては、和歌山・根来寺第Ⅲ地区、福井・一乗谷Ⅲc期に類例を見ることができ、16世紀第3四半期頃の特徴として捉えて良いものと考えている。また、16世紀第2四半期に位置付けられた1号堀が埋没した後に構築されていることから、16世紀第3四半期頃という年代は妥当であろう。

2号堀出土遺物(第3図38~48)

2号堀は1号堀を切って構築されている障子堀で、多量の漆器、木製品とともに染付、白磁、青磁、灰釉、初山、常滑甕、かわらけ、瓦が出土している。

磁器は中国製の染付と青磁がある。染付碗は、底部片がないので「饅頭心」になるかは



第3図 箱根口跡1号井戸 (29~33), 1号溝 (34~37), 2号堀 (38~48), 3号堀 (49~53)

不明だが、おそらく染付碗E類に分類できるもの(38・39)と、染付皿E類(40・41)である。これらの染付は、碗・皿とも輪郭を描いてから内側を染め濃みする「万暦様式」(矢部1983)がほとんどを占める(38～41)。青磁は「菊皿」である(43)。44は灰釉皿、45は初山窯の碗か小杯で、46は播鉢で瀬戸・美濃産である。かわらけは8点のうち、7点が糸切り底のA類である。

2号堀は染付皿E群、いわゆる「万暦様式」で占められるようになり、白磁、青磁の量は減少する。「万暦様式」は天正18年(1590)に廃絶された東京・八王子城で多くみられることから、16世紀第4四半期に位置付けられる。特に天正年間の後半の指標となるものと考えている。また、2号堀は障子堀であったが、小田原城では障子堀の構築年代は天正13年(1585)に構築されたといわれる「新堀」、天正18年(1590)直前に構築されたといわれる「大外郭」など、これまでの城郭研究で天正年間の後半に構築されたといわれる縄張で検出されている。こうしたことから、この堀の出土遺物の年代は天正年間を遡ることはないといえる。

3号堀出土遺物(第3図49～53)

3号堀は1号堀を直交するように切って構築されている堀で、幅約16m、深さ約5mを測る。覆土は最下層に15cm程の水中堆積層があるだけで、その上層はロームブロックを主体とした埋め土により一気に埋め立てられた状況が観察された。この埋め土から多量の瓦とともに若干の陶磁器が出土している。

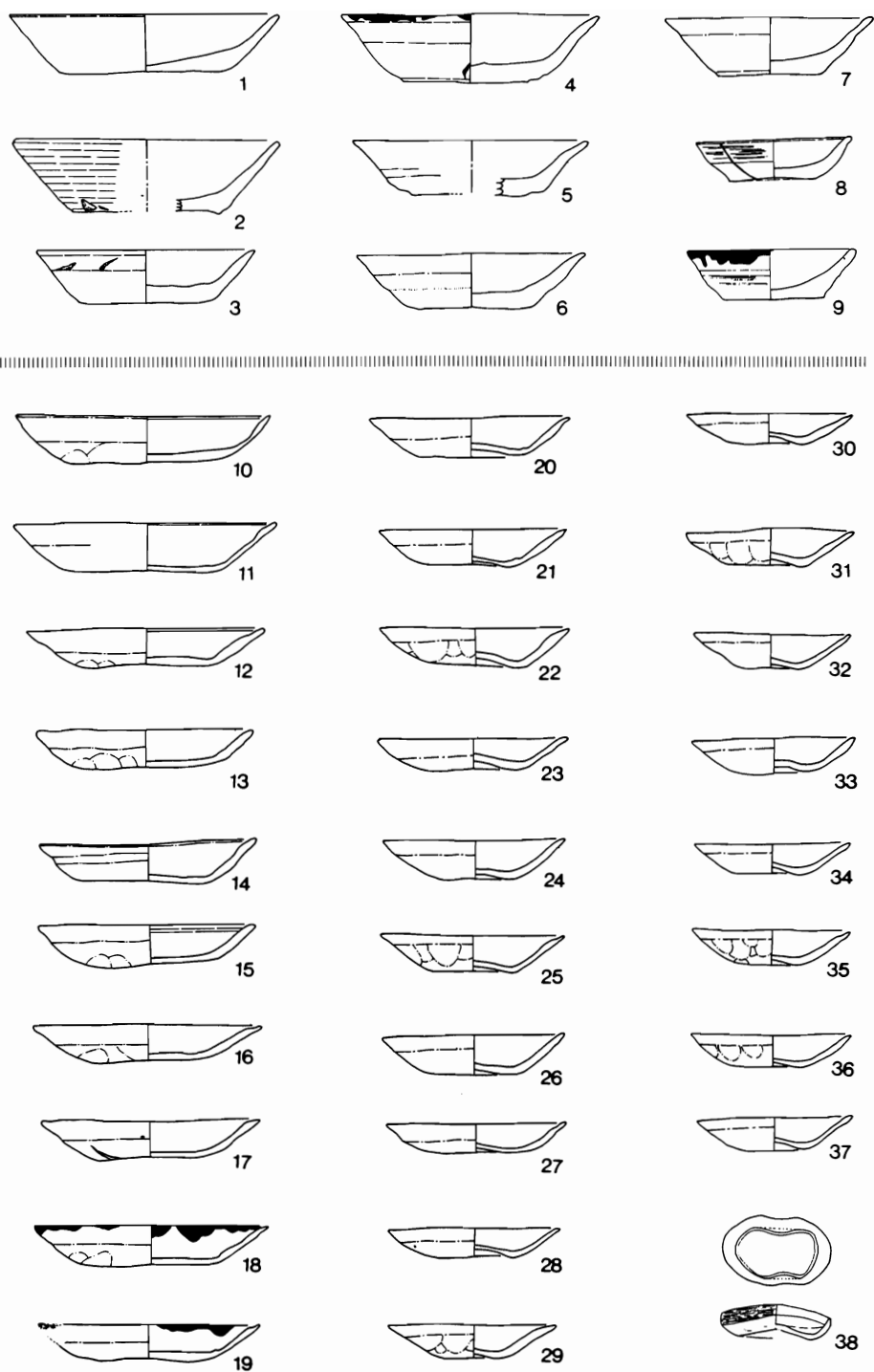
磁器は、図化していないが、口縁が内湾すると思われる染付皿、端反りになると思われる白磁皿の破片がある。志野皿は鉄絵のもの(49)と文様を描かないものがある(50)。天目碗は鉄化粧が施されたもの(51)、かわらけは小破片でA類・B類が2点ずつである。瓦は大量に出土しているが、軒丸瓦(52)と軒平瓦(53)ともに数種類同范で占められていることから、新規に屋根に葺いたものが一括で廃棄されたものと考えられる。

3号堀は稲葉氏による近世化工事の姿を示す正保図に描かれていないことから、寛永9年(1632)以前であり、志野が含まれていることから16世紀末から17世紀初頭に位置付けられる。出土遺物の年代や堀の覆土の状況から慶長19年(1614)の大久保忠隣の改易に伴う破却によって埋め立てられた可能性が高い。

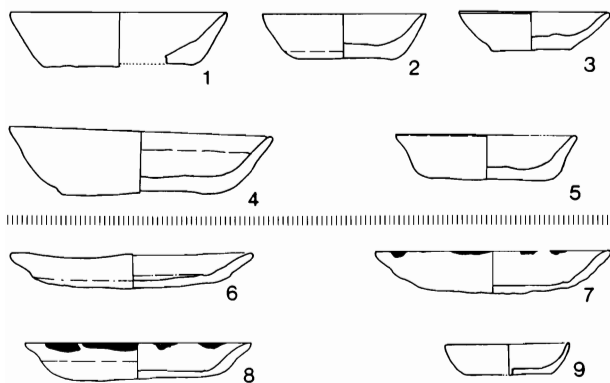
(2) 焰硝曲輪

焰硝曲輪は城米曲輪の北西に位置する曲輪で、道路建設に伴う調査が実施されている。この調査で焰硝曲輪の肩部や曲輪内部の地業層が検出された(降矢1991)。2-2-3区では最下層の地業層とその上層の地業層C面から層位的に形態の異なるかわらけが出土している。

最下層出土遺物(第4図1～9)



第4図 焰硝曲輪最下層(1~9), 上層(10~38)



第5図 城米曲輪最下層（1～5），1号溝（6～9）

以外出土遺物はないが，上層出土の陶磁器とかわらけとの層位的な関係から，15世紀末から16世紀第1四半期に位置付けておく。

上層出土遺物（第4図10～38）

2-2-3区上層（地業層C面）からは，多量のかかわらけと若干と陶磁器が出土している。かわらけは全て手づくね成形のB類で，底部が平らなもの（10～19），底部中央が盛り上がるいわゆる「へそかわらけ」と呼称されるもの（20～37），いわゆる「耳皿」（38）等によって構成される。こうしたかわらけには図示していないが，中国染付C群で外面に花唐草文や蓮弁文が描かれるものや灰釉皿，天目碗が相伴している。これらは16世紀前半～中葉に位置付けられると考えられるもので，箱根口1号堀とほぼ同時期か若干後出するものと考えたい。

（3）城米曲輪

城米曲輪は近世小田原城本丸の北東側に位置する曲輪で，史跡整備を目的とした遺構確認調査が実施されている（塚田・諏訪間1984）。ここでは，近世の米蔵跡と考えられる礎石列や，掘立柱柱穴列，溝等多くの遺構が検出されている。また，この曲輪は谷地形を埋め立てして盛土整地が繰り返し行われたことが確認された。この盛土整地は深いところで約3mにも及んでいた。

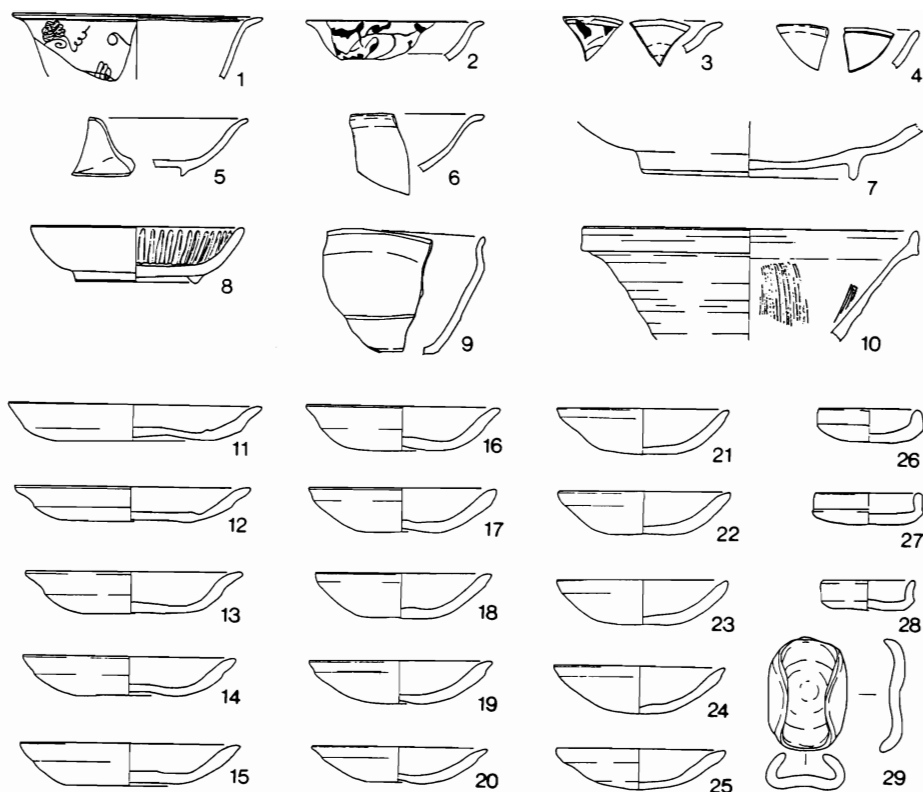
最下層出土遺物（第5図1～5）

第3トレンチ東端（E2-13グリッド）の最下層（GLから-3m）からかわらけ5点が一括で出土している。いずれも厚手の糸切り底のもので，器壁が直線的に立ち上がるものの（1～3）とやや外反するもの（4・5）があり，A-1類とA-2類に分類できる。

これらのかかわらけは城米曲輪の最も古い時期に形成された整地層から出土したことや，焰硝曲輪最下層と同じ形態であることから，15世紀末～16世紀第1四半期に位置付けておく。

1号溝出土遺物（第5図6～9）

2-2-3区最下層からはかわらけが多量に出土した。いずれも厚手の糸切り底のかかわらけで，やや器高が高く口縁部が直線的に立ち上がるものと（1～3・9）やや外反するもの（4～8）がある。前者は山口分類A1類に，後者はA2類に分類される。かわらけ



第6図 山本内蔵邸跡第Ⅳ地点 かわらけ廃棄層

第1トレンチ西端で確認された1号溝では、若干の陶磁器とともにかわらけが出土している。かわらけはほとんど手づくねのB類で占められるが(6～8)，糸切り底で内湾するもの(9)も見られる。これらは共伴する染付などが明らかではないが，かわらけの形態に，箱根口1号堀との類似性が認められることから，16世紀第2四半期を中心とした年代に位置付けておく。

(4) 山本内蔵邸跡第Ⅳ地点

本地点は小田原城三の丸の東に展開する武家屋敷地に位置し，幕末には山本内蔵邸（やまもとくらてい）があったことからこの名称で呼ばれる。調査は診療所併用住宅建設工事に伴い行われたもので，障子堀，溝，かわらけ廃棄層等の遺構が検出された。（諏訪問1990b）

かわらけ廃棄層出土遺物（第6図1～29）

明染付，白磁，瀬戸・美濃灰釉陶器，播鉢，常滑甕，そして多量のかわらけが出土している。染付は，口縁部が屈曲する碗（1），端反り皿（2～4），端反りの白磁皿（5～7），瀬戸・美濃産は，内面に丸彫の縦縞を持つ灰釉皿（8），天目碗（9），播鉢（10）などがある。かわらけは，集計していないがおそらく1,000点以上の破片数があると思われるが，

ほとんどが手づくねのB類で、中型(11~15)、小型(16~25)に分けられ、底部から口縁部にかけて直立する小型のもの(26~28)、いわゆる耳皿(29)も特徴的に認められる。糸切り底を呈するA類は数点と極めて少ない。

これらの陶磁器群は、口縁部が屈曲する染付碗の存在から小田原Ⅱb期に位置付けてきたが(大島1990)、丸彫の灰釉皿やその他の陶磁器からは16世紀第3四半期の特徴を示していると思える。また、へそかわらは焰硝曲輪上層と系統的につながるもので、その他のⅡb期には認められない。このため、ここでは16世紀第3四半期から第4四半期前半にかけての幅で捉えておくことにする。

(5) 大久保弥六郎邸跡

本地点は小田原城三の丸の東に展開する武家屋敷地に位置し、幕末には大久保弥六郎邸があったことからこの名称で呼ばれる。調査は消防署の車庫建設工事に伴い行われたもので、石列、石組、集石、方形竪穴、井戸、土坑など戦国期から近世の遺構が密集して検出された(杉山他1992)。

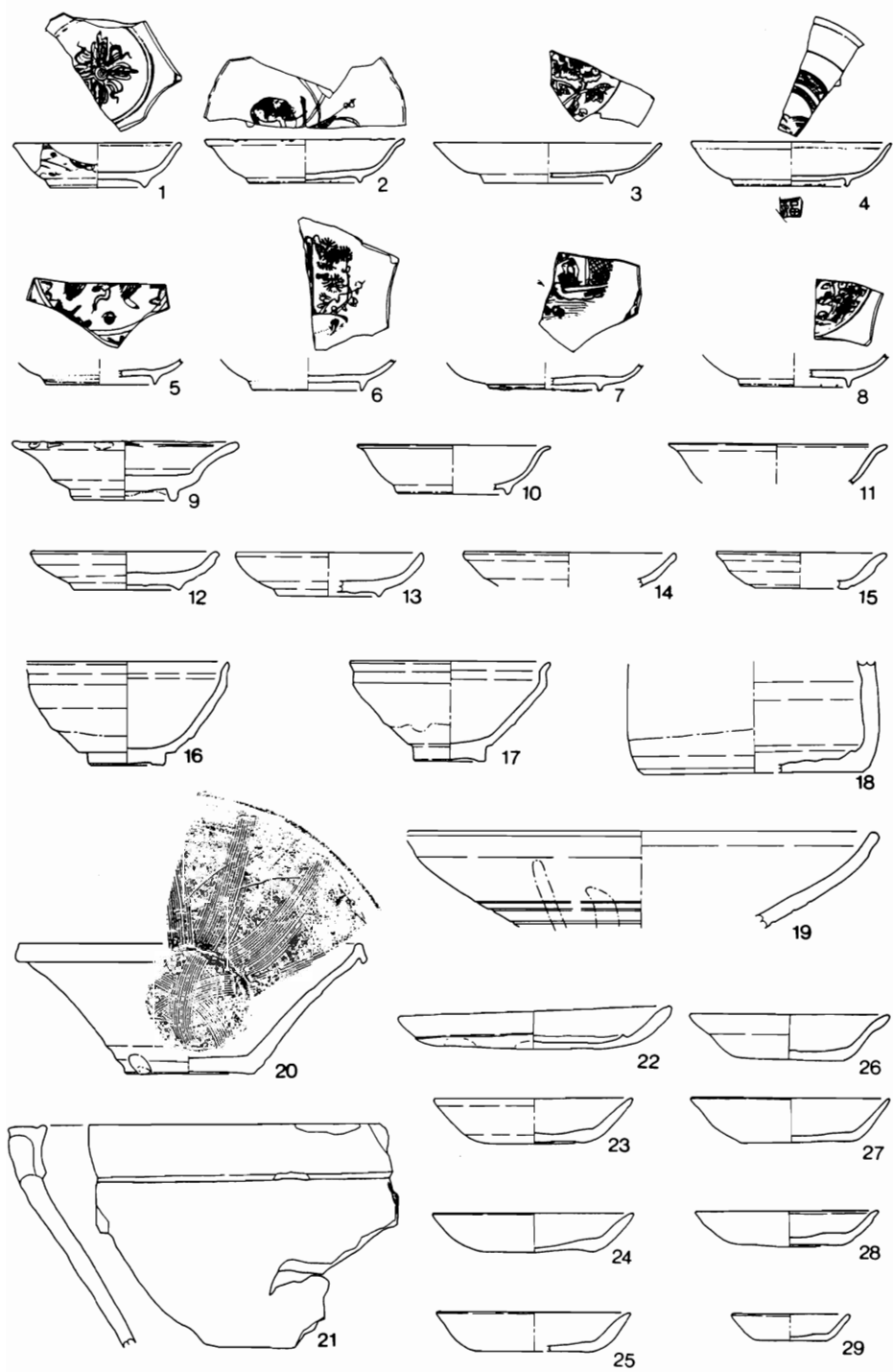
3号井戸出土遺物(第7図1~29)

3号井戸は直径3~3.9m、深さ4.4mを測る遺構で、報告者によって井戸とされるが、壁面に足場と思われる掘り込みがあり、外周に小ピットが並んで検出されていること、さらには湧水点まで達していないことなどから、別の遺構の可能性もあるものである。この遺構からは、明染付、青磁、白磁、灰釉、鉄釉、擂鉢、甕、かわらけ等の陶磁器群がまとまって出土している(井上1992b)。

染付皿は、薄手で高台の断面が三角形を呈するもので占められる(2~8)。口縁部は端反りで波状になるもの(2)を除き、内湾するものが多い。絵付けは濃い細線で輪郭を描き、その内側を染め濃みするもので、草花や動物などが描かれている。これらは「万暦様式」と呼ばれているもので(2~8)、小野分類の染付皿E群に分類される。1点だけやや厚手でやや端反りになり、見込みに十字架文、外面に唐草文が描かれるやや古い様相を示す染付皿B1類がある(1)。青磁は稜花皿(9)で、1と同様に伝世したものと考えられる。白磁は、端反りの皿C群がほとんどを占める(10・11)。灰釉はすべて全面施釉の皿で口縁部が内湾するもので占められる(12・13)。鉄釉は口縁部が内湾する全面施釉皿がほとんどであり、1点のみ縁釉皿が認められる。また、18は鉄釉の壺、19は鉄釉の大皿などいずれも瀬戸・美濃産である。擂鉢は瀬戸・美濃産が多いが20は志戸呂産の可能性もある。甕は常滑産である(21)。

かわらけは破片数で235点が出土しているが、手づくねのB類は数点で、ロクロ成形のA類で占められる。

これらの陶磁器群は染付皿E類の「万暦様式」の存在から、八王子城との類似性が指摘



第7図 大久保弥六郎邸跡 3号井戸

できる。八王子城は天正後半期に築城され、天正18年（1590）に廃絶された存続期間の極めて短い絶対年代の明らかな城であるが、ここでの採集陶磁器やその後の調査資料と対比が可能である。灰釉皿も全てが内湾するもので、伝世したとおもわれる染付皿（1）と青磁皿（9）を除けば概ね天正後半期の年代を与えてよいと考えている。

（6） 二の丸中堀

二の丸の南東部に位置し、二の丸の主部（藩主屋敷）と馬屋曲輪並びに馬出曲輪とを隔てる堀である。1983年～現在まで継続して調査が行われている。これまでの調査では、稲葉氏による寛永期の近世化工事によって成立した石垣や堀、その下層から後北条時代の障子堀、井戸や石組水路（馬屋曲輪1号水路）、さらに下層より、第1地業層、後北条時代以前の堀（銅門1号堀）など多くの遺構が検出されている（大島1990b）。

第1地業層出土遺物（第8図1）

御茶壺曲輪及び馬屋曲輪の最下層に暗黄褐色土で炭や焼土を含む地業層が広く展開している。この層中には土坑や溝等の遺構が確認されているがいずれも部分的な調査であるため詳細は不明である。本層から明染付や灰釉皿、鉄釉皿、かわらけ等が出土している。

明染付皿は、内面に玉取り獅子文が描かれる端反り皿で、染付皿B1類に分類される（1）。この他は灰釉の縁釉皿、厚手糸切り底のかわらけ等が出土している。染付皿は山梨県新巻本村出土例など15世紀後半まで遡る古いタイプである。こうしたセットは15世紀まで古くなる可能性があるものの、共伴するかわらけが、焰硝曲輪最下層や城米曲輪最下層と共通するものであることから、16世紀第1四半期に位置付けておく。

馬屋曲輪1号水路（第8図2～7）

馬屋曲輪の第1地業層より上層で確認された石組水路で、覆土下層から明染付碗（2）、明青磁碗（3）、白磁杯（4）、瀬戸・美濃製播鉢（5）、かわらけ（6・7）等が出土している。

染付碗はD類に分類されるもので（2）、青磁碗は細線の蓮弁文が描かれるもの（3）、かわらけは手づくね（6）が主体となっている。年代的には、遺構の層位的な関係とかわらけの形式的な位置付けなどから、16世紀第2四半期を中心とした時期に位置付けておく。

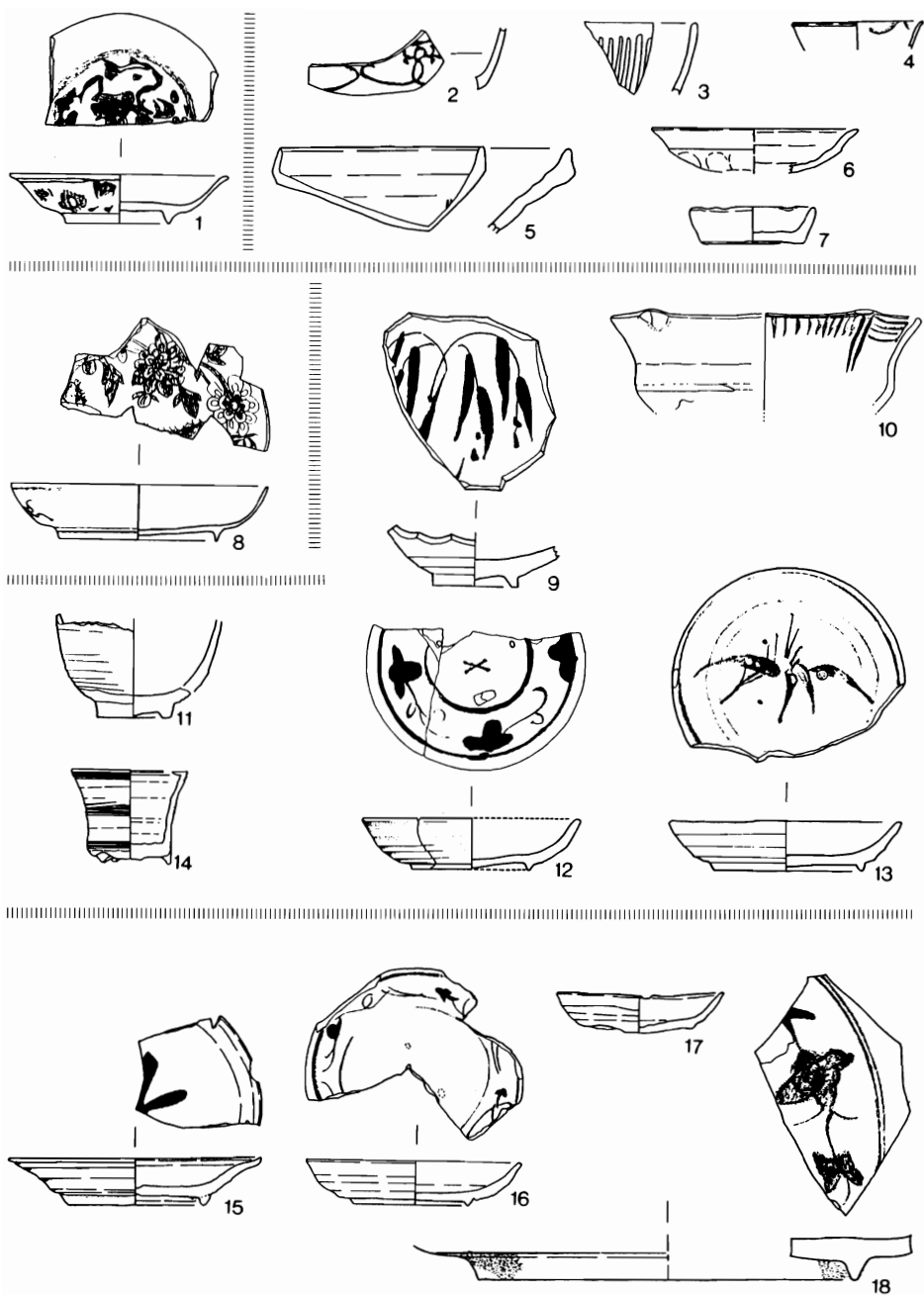
銅門1号石垣（第8図8）

寛永期の石垣の裏から、矢穴を持たない慶長期の特徴を持つ石垣が検出されたが、その石垣の目地を埋める土から明染付、唐津碗、天目碗が出土している。

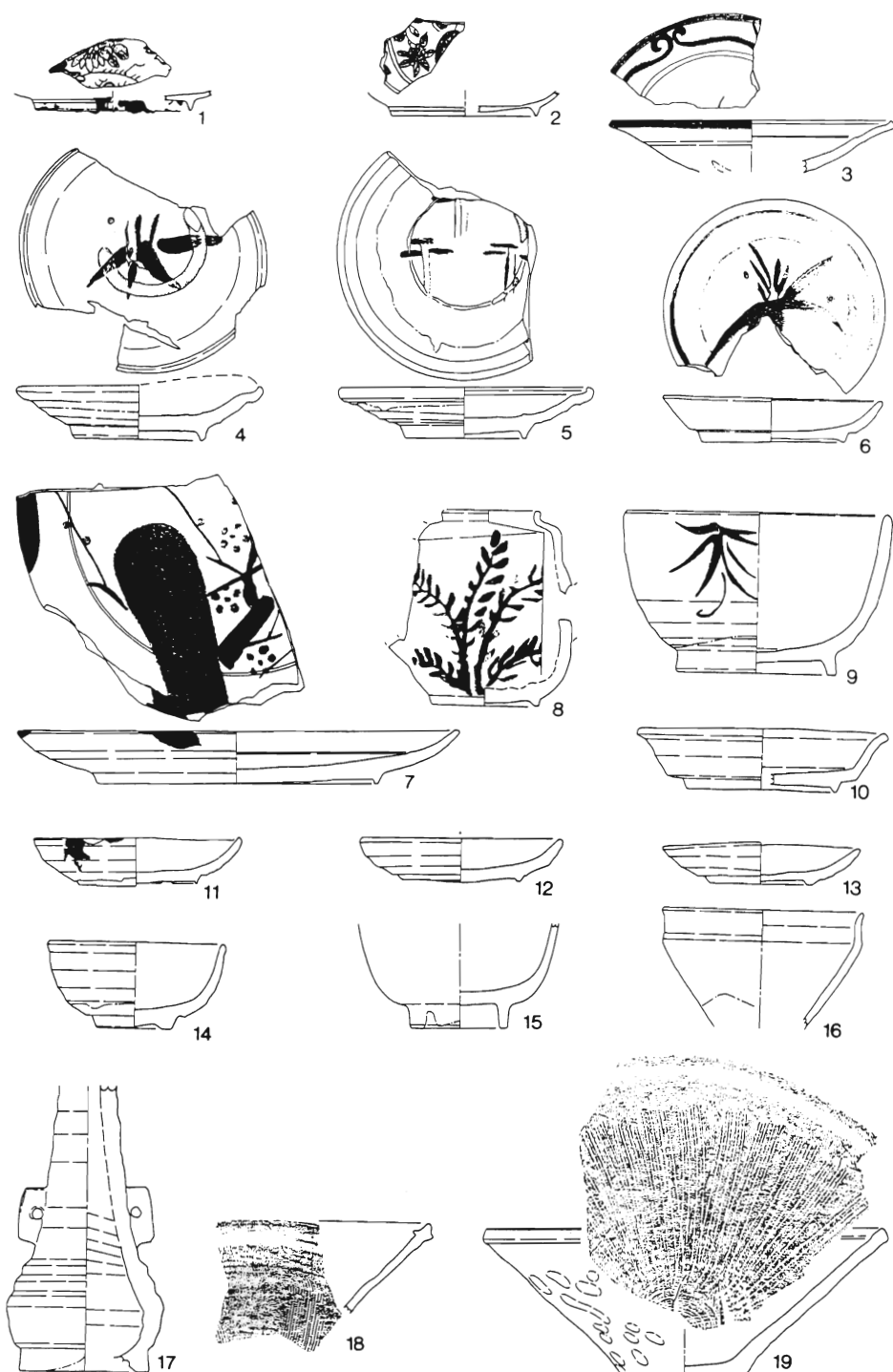
染付は内湾する染付皿E類（8）、天目碗は鉄化粧しないものである。これらの陶磁器は、唐津碗の存在から慶長年間の17世紀初頭に位置付けたい。

障子堀B類覆土上層（第8図9～13）

調査区の東半部の下層から確認された。宝永火山灰層より下層に位置し、後北条時代の



第8図 二の丸中堀 第1地業層(1), 馬屋曲輪1号水路(2~7), 銅門1号石垣(8), 障子堀B2類上層(9~13), 住吉橋橋台盛土(15~18)



第9図 欄干橋町遺跡 34号土坑

井戸を切っている。銅門枳形部分では寛永9年（1632）以降に普請した石垣内部まで続いている。覆土は水中堆積を示し、その上層の砂礫層から志野、唐津及び漆製品、瓦が比較的まとまって出土した。

唐津は皿（9）と向付（10）でいずれも鉄絵が描かれている。志野は鉄絵が描かれている皿（12・13）と碗（11）がある。また、香炉は産地不明であるが、志戸呂産の可能性はある。

これらの陶磁器群は上限を志野・唐津の出現時期である16世紀末、織部を含まないことから下限は元和以前と考えられる。遺物の年代観と砂礫混じりの搬入土が包含層であったという出土状態などから、箱根口3号堀と同じく、慶長19年（1614）大久保忠隣改易に伴う小田原城破却の状況を示しているものと推定している。

住吉橋橋台盛土（第8図15～18）

住吉橋橋台の石垣は、寛永9年（1632）以後数年の期間に成立したと考えられる。この橋台内の盛土中から織部（15）、志野（16）、明染付皿（18）、かわらけ（17）等が出土した。これらの陶磁器群は遺構の構築年代が1632年から数年の期間であると推定されることが、織部を含み、伊万里染付が含まれないことなどから1630年代の前半に位置付けたい。

（7）欄干橋町遺跡

欄干橋町遺跡は、後北条時代初期から現在まで続いている「外郎（ういろう）家」の屋敷地である。「外郎家」は、「透頂香（とうちんこう）」という丸薬の製造・販売をしていた特別な商人であった。1987年に薬工場建設に伴って調査を実施した（諏訪間1990c）。調査面積約70㎡の中に、土坑44以上、石組み水路、溝等が検出された。これらの遺構の内、土坑は全て切り合い関係を示しているため、その出土遺物の相対的な変遷を明らかにすることが可能である。

34号土坑出土遺物（第9図）

本遺構は東西3.2m南北1.5m以上、確認面から2mを測る大型の土坑である。出土遺物は、明染付（1・2）、唐津皿（3）、織部（4・5・7）、志野（6・8・10～13）、灰釉碗（15）、天目碗（16）鉄絵の灰釉碗（9）、鉄釉瓶（17）、播鉢（18・19）などが多量に出土した。この他に常滑甕や漆器碗、木製品等も出土している。

これらの陶磁器群は織部・志野が主体となっており、伊万里は含まれていない。小田原城での織部の出現は元和年間以降と考えており、この陶磁器群の廃絶年代は元和から寛永年間の前半期に（1615～1630年代）押さえておきたい。

3 戦国～近世初頭の陶磁器群の様相

以上、小田原城及び城下の戦国期から近世初頭（伊万里出現以前）までの陶磁器群（かわらけを含む）について、遺構出土の一括遺物について個々に事例を挙げ、組成と年代観について検討を加えてみた。前述のとおり、小田原Ⅱ期はⅡa期とⅡb期に細分が行われているが、Ⅱa期は15世紀末から16世紀第3四半期までの約80年間の期間、北条早雲から4代氏政までの時代に相当する。この細分をしなければ、小田原城の発展過程を検討する時間軸とはなり得ない。ここでは、今回はその後の資料の増加や他の城館跡の成果を基にし、戦国期から近世初頭にかけての陶磁器群の変遷をまとめてみよう。

Ⅱa 期古段階

主な資料としては、焰硝曲輪最下層、城米曲輪最下層、新道地点、二の丸中堀・馬屋曲輪第1地業層、同御茶壺曲輪第1地業層などが挙げられる。本期はかわらけA-1類を指標とする時期で、共伴する陶磁器の内容が不明である。本期のかわらけは、厚手のロクロ成形のもので、底部から口縁部に向かって直線的に立ち上がるタイプとやや外反するタイプが特徴的である。器高は本期以降のかわらけと比べて高い。また、手づくね成形のB類を含まない点も重要な点である。本期の年代は、各地点の遺構は地山直上に構築されていることから後北条時代の初期の曲輪形成に関する地業層であると考えられること、焰硝曲輪では、箱根口1号堀の出土遺物と対比できる染付碗C群や手づくね成形B類のかわらけとの層位的な関係により、本期を年代的には15世紀から16世紀第1四半期と想定しておく。なお、御茶壺曲輪第1地業層では、A-1類に類似する厚手かわらけと染付皿B1類が共伴する可能性があり、今後、本段階のかわらけに共伴する染付や灰釉が確認できる可能性もある。

Ⅱa 期中段階

主な資料は、箱根口1号堀、城米曲輪1号溝、焰硝曲輪上層などが挙げられる。年代的には、16世紀第2四半期を中心とした時期を推定している。本期は明染付碗・皿、白磁、灰釉皿、天目碗、擂鉢、甕、そして、多量のかわらけによって構成される。染付は、碗C群と端反り皿B1群、碁笥底皿C群が中心となる。文様は碗の外面に牡丹文、飛馬文、唐草文、皿は外面に唐草文、内面に十字花文や玉取獅子文が描かれる。白磁は端反り皿C類が中心で「菊皿」のD類は含まれない。青磁は「稜花皿」や「細蓮弁文碗」が認められるが、量的には少ない。国産陶器は甕が常滑産であることを除けば、瀬戸・美濃産で占められる。灰釉皿は大窯段階初期の端反り皿が認められるが、窯窯段階の縁釉皿も一定量含まれる。本段階は内湾する皿は含まれない時期として捉えている。擂鉢はほとんどが瀬戸・美濃産で口縁部が外に膨らむタイプで占められる。かわらけは、前段階に特徴的であったロ

クロ成形のA類は器高が低くなり皿形になる。さらに、本段階より手づくね成形のB類が出現する。

Ⅱa 期新段階

主な資料は、箱根口跡1号井戸、同1号溝などが挙げられるが、いずれも断片的な資料である。年代的には16世紀第3四半期を中心とした時期を推定している。本期は、前段階の組成に染付碗D類（饅頭心）、染付四方櫛文と白磁菊皿のC群、青磁菊皿瀬戸・美濃産は灰釉皿が内湾するものが新たに加わることが指標となる。

Ⅱb 期

主な陶磁器群は、箱根口跡2号堀、大久保弥六郎邸跡3号井戸、山本内蔵邸跡第Ⅳ地点かわらけ廃棄層などが挙げられる。年代的には16世紀第4四半期を考えている。本期は、染付皿E群とした輪郭を細線で描きその中を染め濃みする万暦様式の染付の出現が画期となる。灰釉や鉄釉の皿は内湾するもので占められるようになる。本期には鉄釉皿に初山や志戸呂なども出現する。かわらけは手づくね成形のB類が主体を占める山本内蔵邸跡かわらけ廃棄層、ロクロ成形A類を卓越する大久保弥六郎邸跡3号井戸とがあり、地点による差が激しく本期の指標とはなりにくいが、前者をⅡa 期中段階からの系統をひくものとしてやや古く捉えておきたい。

Ⅲa 期

主な陶磁器群は、箱根口跡3号堀、二の丸中堀障子堀B類覆土上層等が挙げられる。本期は、志野・唐津の出現を画期とし設定される。前段階まで主体であった美濃灰釉皿はほとんどなくなる。年代的には天正18年（1590）以降、慶長19年（1614）までの時期を設定している。これまでのところ、後北条時代に位置付けられる遺構からは志野・唐津は出土していない。天正18年（1590）に廃城した八王子城や山中城においても認められないことから、慶長期になって出現するものと考えられる。堺、大坂城、岐阜城など畿内の遺跡でも志野の出現は慶長期、それも1600年直前とされていることから、小田原城でも同じように考えられよう。なお、本期以降は、瓦が普遍的に出土するようになる。志野・唐津とともに瓦の普及も近世化の指標となるといえる。

Ⅲb 期

主な資料は、欄干橋町遺跡34号土坑、同36号土坑、住吉橋土橋盛土などが挙げられる。本期は織部の出現を画期として設定される。年代的には、伊万里出現までの時期で元和年間から寛永10年代（1615～1630年代）を設定している。

このように、小田原城における戦国期の陶磁器の変遷は小田原第Ⅱa 期が16世紀第1四半期、同第2四半期、同第3四半期と3段階と、万暦様式の染付と灰釉丸皿によって特徴付けられるⅡb 期を加えた、4区分が可能になりつつある。近代初頭についても志野・唐津と織部という新出陶磁器の出現を画期として1630年代までを2区分することが可能であ

る。今後資料を増加させ補強していく必要があるが、こうした編年網の整備によってより年代的にしぼりこんだ遺構の比較・検討ができるようになると思われる。

おわりに

以上、小田原城出土の戦国から近世初頭の陶磁器とかわらけについて、各遺構単位で抽出し、組成と年代観について検討を加え、小田原編年のⅡa期の細分を中心に変遷を検討してみた。

小田原城は、継続期間が長い遺跡であるが、年代の明らかな大火の焼土層、城主の交替等による大規模な縄張の改変など、年代を決める「定点」資料が少なく、時間軸の設定が難しいといえる。小田原城での陶磁器研究は、新出陶磁器を示準化石化した編年であるが、そろそろ、遺構単位の器種組成の内容や各生産地毎の型式的な検討へと展開していかなければならないと考えている。また、かわらけについても型式的な検討を踏まえてさらに議論を深めていかなければならないと考えている。本稿を執筆する前に小田原城の戦国期の陶磁器群はある程度蓄積がなされてきたとの認識から、当該期をまとめてみようと思ったが、出土例は多いものの、遺構一括の基準となるまとまった資料が少なく、また、出土していても帰属が明らかでなかったり、既に報告がなされていても図化されていないものなど、資料が提示できなかったものが多かった。こうした未発表資料の資料化をはじめとする小田原城の調査・研究の様々な問題点をどのように克服していくか、小田原城の調査に携わっている諸氏と共に考えていきたい。

筆者は小田原城の出土陶磁器群の編年網をより短いオーダーで捉え、時間軸とすること、そして、その細かい年代観で各調査地点の遺構の位置付けを行い、将来、20年のオーダーでの小田原城の縄張の展開・変遷が追えるようになればと願っている。本稿はそうした目論見の基礎的な作業の一端としてまとめさせていただいた。

最後になったが、本稿執筆にあたり、共に小田原城の調査研究にあたっている、塚田順正、大島慎一、山口剛志、井上由美子の各氏には様々なご教示を受けた。また、村田文夫氏には、執筆の機会を与えていただき、締め切りを過ぎた原稿を寛大に待っていただいた。以上の方々に深く感謝申し上げます。

(1993.1.27)

引用・参考文献

- 井上由美子 1989 「Ⅴ 検出された遺物」『愛宕山』小田原市文化財調査報告書第27集
井上由美子 1992 a 「Ⅵ (2) 箱根口跡の遺物組成とその変遷」『小田原城三の丸 箱根口跡』小田原市文化財調査報告書第37集 小田原市教育委員会
井上由美子 1992 b 「Ⅴ 検出された遺物」『小田原城三の丸 大久保弥六郎邸跡』小田原市文化財調査報告書第36集

- 上田 秀夫 1991 「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」『関西近世考古学研究』1 関西近世考古学研究会
- 内堀信雄他 1990 『千畳敷－織田信長居館伝承地の発掘調査と史跡整備－』岐阜市教育委員会
- 大島 慎一 1990 a 「小田原城とその城下の出土遺物」『小田原城とその城下』小田原市
- 大島 慎一 1990 b 「小田原城・二の丸中堀の調査」『小田原城とその城下』
- 小野 正敏 1982 「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2
- 小野 正敏 1985 「出土陶磁器よりみた15・16世紀における画期の素描」『ミュージアム』416
- 小野 正敏 1988 「小谷城より出土した遺物について」『史跡小谷城』湖北町教育委員会
- 北野 隆亮 1990 「15・16世紀貿易陶磁器－1980年代の編年研究を中心として－」『貿易陶磁研究』No.10
- 古泉 弘他 1991 『竹橋門』東京国立近代美術館遺跡調査委員会
- 新藤 康夫他 1990 『八王子城跡』IX 八王子市教育委員会
- 杉山 博久他 1992 『小田原城三の丸 大久保弥六郎邸跡』小田原市文化財調査報告書第36集
- 鈴木 秀典他 1988 『大坂城跡』Ⅲ 大阪市文化財協会
- 鈴木 秀典 1990 「輸入貿易陶磁器の編年の検討－天正年間から江戸前期－」『貿易陶磁研究』No.10
- 鈴木 正貴 1990 「尾張の城館遺跡出土の陶磁器－16世紀を中心として－」『考古学フォーラム I』
- 諏訪間 順 1990 a 「近世城郭」『歴史考古学の問題点』近藤出版
- 諏訪間 順 1990 b 「小田原城・三の丸遺跡（難波齒科地点）の調査」『小田原城とその城下』
- 諏訪間 順 1990 c 「小田原城下・欄干橋町遺跡（外郎邸）の調査」『小田原城とその城下』
- 諏訪間 順 1992 「小田原城における戦国期の調査」『考古学ジャーナル』353
- 諏訪間 順 1993 「Ⅶ（4）箱根口門跡出土の近代陶磁器と小田原Ⅶ期の設定について」『小田原城三の丸 箱根口門跡』小田原市文化財調査報告書第40集
- 諏訪間 順・井上由美子 1992 「小田原城三の丸 箱根口跡」小田原市文化財調査報告書第37集
- 田代 道彌 1980 「小田原城」『日本城郭大系』6 新人物往来社
- 塚田 順正 1990 「小田原城調査の現状と課題」『小田原城とその城下』
- 塚田 順正・諏訪間 順 1984 「史跡小田原城跡 城米曲輪」
- 塚田 順正・諏訪間 順・大島 慎一 1988 「小田原城及び城下における陶磁器群の変遷」『貿易陶磁研究』No.8
- 塚田 順正・大島 慎一 1989 「史跡小田原城跡二の丸中堀の調査」『第13回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
- 塚田 順正・諏訪間 順・大島 慎一・山口 剛志 1991 「小田原城及び城下について」『江戸遺跡研究会第4回大会 発掘された江戸時代』江戸遺跡研究会
- 藤澤 良祐 1991 「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 降矢 順子 1990 『小田原城焰硝曲輪－都市計画道路栄町・城内線改良に伴う発掘調査－』小田原市文化財調査報告書第33集
- 矢部 良明 1983 「八王子城出土の中国陶磁の特色」『八王子城』八王子市教育委員会
- 矢部 良明 1990 「出土陶磁器から見た小田原の文化」『小田原城とその城下』小田原市
- 柳谷 博他 1984 『本町小学校遺跡』小田原市文化財調査報告書第14集
- 山口 剛志 1991 「小田原城とその城下出土のかわらけについて」『小田原市郷土文化館研究報告』27